

天平グレート・ジャーニー

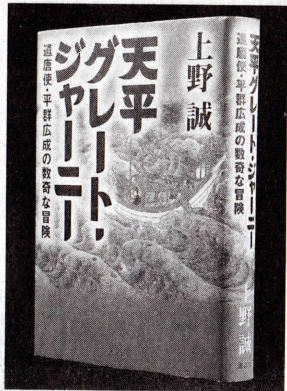
上野誠著

講談社 2500円

遣唐使判官(第三等官)となって唐に渡り、帰路に遭難して崑崙国(今のヴェトナム)に漂流、艱難辛苦の果てに蘇州(揚子江下流)に戻り、長安を経て渤海国(今の中国東北部)へ。その後、渤海国の使節とともに帰国するも出羽国(山形県)吹浦に漂着するという途方もない旅をした8世紀の官人、平群朝臣広成を主人公とした長編小説である。難波を出航したのが天平5年(733)4月3日、平城京に帰着したのは同11年10月27日と歴史書には記されているから、足かけ7年にも及ぶ海と陸の旅だった。

もちろん広成は実在の人物であり、その行程も歴史書によって確認できる。その何万キロもの苦闘を、続日本紀や万葉集、懷風藻などの国内文献はもちろん、中国の文献も調べ尽くし現地へ飛んで見聞し、当時のアジア情勢も怠りなく踏まえて、歴史小説でありつつ上質の冒険小説に仕立て上げた、その著者の才能には舌を巻くしかない。もちろん著者は、今のところは古代文学の研究者である。しかし、ただの堅苦しい学者ではないところが、この小説のエンタテ

深みある歴史冒険小説



1960年、福岡県生まれ。著書『はじめる』など。『はじめる』など。『はじめる』など。

インメント性に大いに貢献している。小説として成功している理由は、事実は小説より奇なりという題材のおもしろさにもあろうが、第一は著者の力量であり軽みのある文体のなせる技である。上野誠以外には書けない小説だと思ふ。

内容はとにかく読んでのお楽しみ。四部構成のうちの前半、出発から玄宗皇帝への謁見をすますまでの部分は、遣唐使の旅を淡々と描いているので少々退屈するかもしれない。しかしそれは、後半の奇想天外な漂流記を語るために必要な助走だと思えばよい。読者は、後ろへゆく

とページを繰るのを止められなくなるはずだ。また、この長い旅に絡んでくる脇役たち、遣唐使仲間の秦朝元や海賊あがりの海商・安仁などもいい味を出している。加えて自らの失態が部下を死なせたことに苦しむ広成の葛藤と成長も、小説に深みをもたらすことになった。